

図 3-4 大阪市が取得した時期の測量図

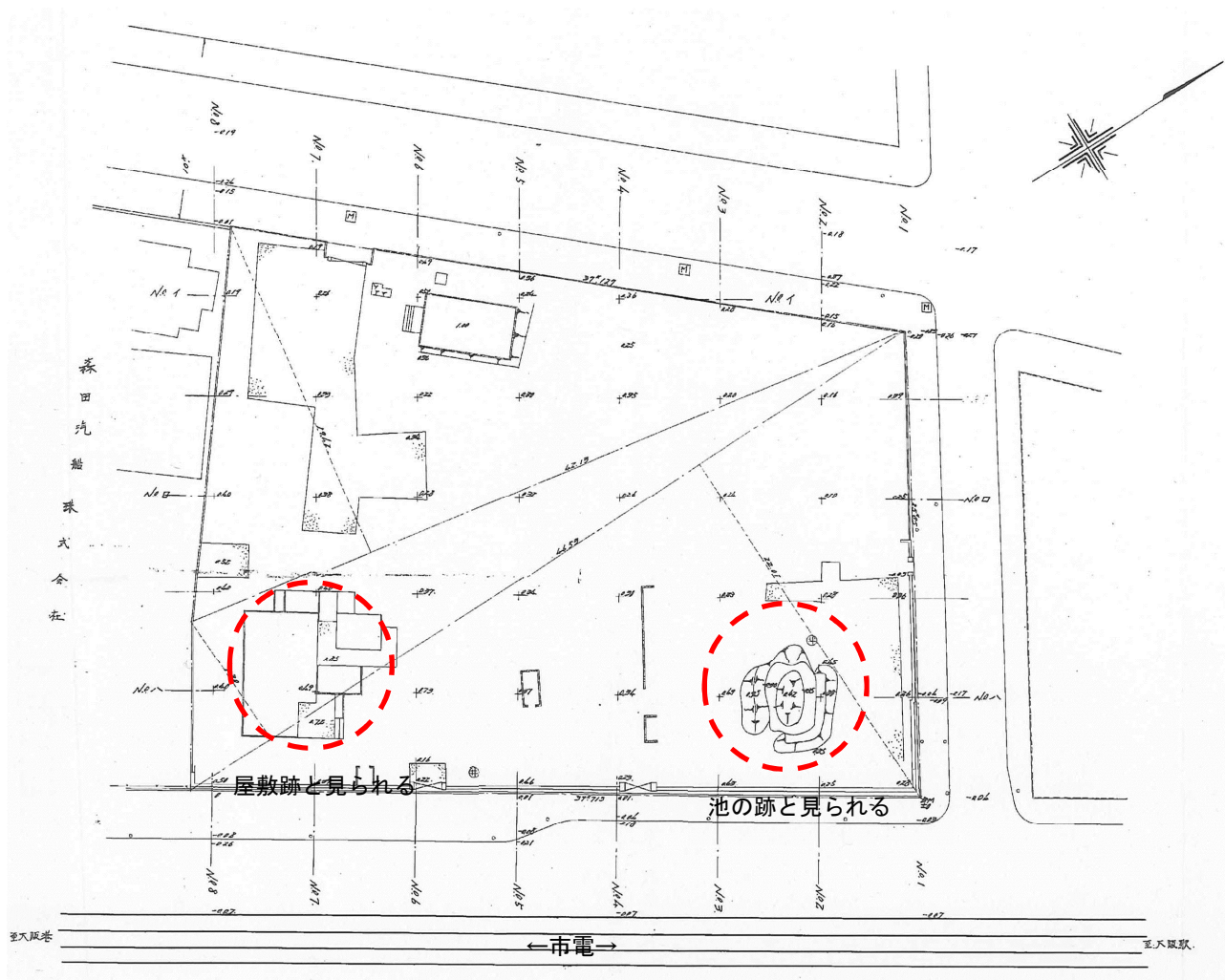


写真 3-1 建設当初の川口ビルの外観



(出典：まちに住まう-大阪都市住宅史)

(4) 建設時の川口ビル

川口ビルが建設された当初は、都心における住宅と事務所・店舗の複合ビルの新たな取り組みとして注目をされたようである。

建設当初の川口ビルの様子を伝える文献

●川口ビル竣工記念の案内状 (S31.5)

「(川口)ビルは、協会の行う住宅ビルとしては規模設備の点に於て全国初めての**創意改善**を行い、而も事務所、店舗を併設したことは所謂、**都心部住宅の今後の在方を指向するもの**として注目されているものであります。」

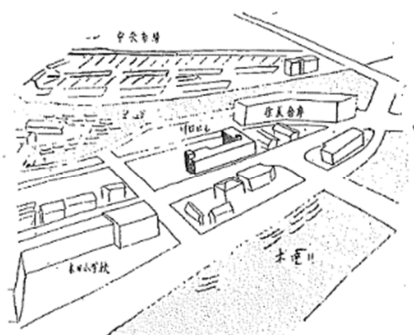
●まさに住まう-大阪都市住宅史 (H1.8)

『高層住宅と並んで**協会住宅**で目を引くのは、**店舗や事務所あるいは公設市場との併存住宅**である。30年度に大阪市中心部と港湾地帯をつなぐ交通の要衝に建設された西区の川口ビルは、こうした試みの最初のものである。地上5階、地下1階のビルには、地階に店舗、1・2階に事務所、3～5階に82戸の専用住宅が配置された。専用住宅の住戸タイプは、**当時としてはバリエーションに富んでいた**。家賃は月額2800円から7400円で、かなり高家賃のものも含まれていたが需要は極めて高かった。』

写真 3-2 建設当初の川口ビルの全景



(出典：住宅年報 1955-56)



(5) 外観意匠

外観については、「大阪府の近代遺産」の記述を抜粋すると以下の通りで、デザインセンスのよさが示されている。垂直性を強調する2階から5階までの袖壁、5階の南東部に曲線状バルコニーなど、平面的なモダニズム的な事務所建築を意識しながら、幾つかのアクセントにより演出している。

川口ビルの外観の評価（大阪府の近代化遺産（平成19年3月大阪府教育委員会））

外観は、共同住宅に特有のバルコニーが設けられていないため、凸凹の少ないスッキリとしたモダニズム建築となっている。共同住宅というより事務所建築を意識した外観である。長辺側には、垂直性を強調するために2階から5階までわずかな袖壁を設け、5階の南西部に緩い曲線状のバルコニーをアクセントとして演出している。

設計者は、池田宮彦が昭和23年4月に設立した大阪建築事務所である。池田は、名古屋高等工業学校建築科を大正4年3月に卒業し、住友総本店営繕課、長谷部竹越建築事務所など関西を中心に活躍した著名な建築家である。

当ビルディングは、供給内容の斬新さといい、デザインのセンスのよさといい、大阪市のめざした住宅政策を語る上で貴重であるとともに、戦後の共同住宅のあり方において先駆的役割を果たしたといえよう。（和田康由）

写真 3-3 建設当初の川口ビル（住宅年報 55-56）



写真 3-4 現在の川口ビル



写真 3-5 南棟外観



写真 3-6 5階南端住戸の緩い曲線状のベランダ



写真 3-7 北棟 2階から5階の袖壁



写真 3-8 でこぼこの少ない北棟外観



写真 3-9 北棟外観詳細



写真 3-10 コーシャハイツ側から見上げ



図 3-5 建設時のイメージパース



3-2 住棟計画

(1) 導入用途

- ・住棟は5階建であるが、住宅は2階から5階に9タイプ82戸の賃貸住宅が配置され、低層部の地下1階から地上2階にかけては、分譲店舗、分譲事務所が配置されている。現在では複合住宅建築物の場合、住宅と複合用途の間にはトレンチを設ける等構造的に区分け、利用階段を分けるなど動線的に分けるなど、安全上、衛生上の配慮がなされるが、川口ビルでは明確には区分けされていない。
- ・また、地下1階には、川口ビルの入居者向けの共同施設として、共同浴場、洗濯室、乾燥室が配置されている。共同浴場については、昭和54年までは営業されていたが、洗濯室、乾燥室については、図面上では確認できるが、実際にどのように利用されていたのかは確認できていない。

写真 3-11 住宅と施設が繋がる廊下



(2) 外部仕上げ

- ・外部仕上げは設計図書には「道路側：1階人造石洗出し目地切 1部タイル貼り 2階以上モザイクタイル貼り(1部リヂットタイル吹付) その他：リヂットタイル吹付」となっている。現況は、吹付けモルタル仕上げ。
- ・現在でも、設置されていた室外機を取り外した跡から、建設当初のモザイクタイル貼りと思われるタイルが見られる。

写真 3-12 建設当初のタイル



写真 3-13 建設当初のタイル

